

若き友へ

1993年6月10日

経済学部教授 高島 均

所感93 - 02 国賊の愛国心

数年前、子供と共にアメリカに滞在していた時の事です。子供が通っていた小学校で、Music and Sign、「音楽と手話の夕べ」とでもいうか、日本の小学校における音楽会に相当するような催しが開かれ、私はそこに出かけました。ホールの正面には、大きなアメリカ国旗が張りつけられており、開会に先立って、全校生徒・教職員が、整然というよりは雑然とした感じで整列し、右手を胸に（左手だったかもしれませんが）、左手を高々と挙げ、アメリカ国歌が斉唱されました。そこは、中西部の小都市で、黒人はほとんど住んでいない街でしたので、皮膚の色の黒い生徒は1人しかおりませんでした。様々な髪の毛の色をした生徒がいました。その中で、小柄で、真黒な髪の毛をした私の子供が、他の生徒達に混じって、右手を胸に当て、左手を高く挙げ、真剣な表情でアメリカ国歌を歌っている姿を見て、胸にジーンと来るものがありました。私には、このように胸を張って直視できる旗、胸に手をおいて真剣な表情で声高らかに歌える母なる国の歌があるだろうか、という思いがよぎりました。

私が子供達を連れてアメリカに出発する前の年は、昭和天皇の病状が悪化している時期でした。新聞は、盛んに「終戦秘話」「天皇の素顔」といった記事を書きたて、その中で、昭和天皇が、いかに太平洋戦争の終戦に当たって、自分の身を捨ててまで国民を守ろうとしたか、そもそも開戦そのものに反対であったとか、日々の暮らしの中でいかに草木を愛し、小さな生き物、「ウミウシ」のようにグロテスクな海の生き物まで愛着を持っていたか、等々繰り返し例を挙げ書きたてていました。私は、当時の授業の合間に、これら人々の素朴な心を打つような天皇ヒロヒトの心根の優しさが、たとえ事実であったとしても、それは、大日本帝国天皇ヒロヒトが歴史の中で果たした本質的な役割と全く関係がない事、肝心なことは、天皇ヒロヒトの存在そのものが、この世の中で果たした歴史的・客観的な役割であり、それのみに基づいて天皇ヒロヒトの戦争犯罪が判断されねばならない事を語ってきました。その後、私は渡米してしまいましたので、天皇ヒロヒトの死去とそれを巡るその後の日本や明治学院大学の動きは、テレビや日本からの便りを通じてしか知りえなくなり、また、私自身、明治学院大学においてなんらかの役割を果たさなければならない立場ではなくなりました。

今また、「皇太子ナルヒト」の結婚を巡り、その「世紀のロマンス」、ナルヒトの純情とそれに「応えた」小和田雅子さんの「素晴らしさ」がマスコミを賑わし、そして、その結婚を国民全てで祝う為に、昨日が国民の休日とされた訳です。一人の人間が死を迎える時その死に心からの哀悼を捧げる事、一人の人間が人生の伴侶を得これからの人生を二人して船出しようとする事に心からの祝福を送ることは、その人間がたとえどんな人間であっても、同じ

時代に生きる人間として当然の事でありましょう。しかし、これが、「日本国の天皇」「日本国の皇太子」という理由で、国民全員に対して、その日を休日として追悼乃至祝福を与えることが強制されるとなると、事は別の問題を含んできます。何故ならば、天皇制国家として存在していたのは大日本帝国であり、その国の国歌が「君が代」であり、その国の国旗は「日の丸」であったが、この大日本帝国は、陸海空三軍の最高統帥権を持つ大元帥である天皇の名によって国民全員を巻き込んで行われた先の大戦の敗北により、消滅してしまい、その後でできた日本国は、その統合の象徴としていかなる旗・いかなる歌を用いるか、未だ曾て国民の議論を踏まえ決定されたこともなく、また、「国の統一の象徴として天皇を戴く」という憲法の規定は、占領軍によって押しつけられた憲法的一条項に過ぎず、この点に関しても太平洋戦争後の国民の間の議論を踏まえたものでないからです。

私は、「国旗」「国歌」を持つことに反対なのではありません。ヒロヒトの死去に哀悼の気持ちがないのでもありません。ナルヒトの結婚を祝福する気持ちがないのでもありません。私は、たとえそれが私個人の意見に合わないものであろうとも、国民投票のような国民の明示的な合意を踏まえた国旗・国歌・国体を持ちたいと思っていますだけです。同時代に生きた一人の人間としてのヒロヒトの死去に対し、哀悼の気持ちを持つという事なのです。同時代に生きる一人の人間としてのナルヒトの結婚に対し、祝福を送るという事なのです。日本の社会においては、様々な事柄が、特にその事柄が重要であればある程、きちっとしたプロセスを経て決定されるのではなく、「何となく」「曖昧のうちに」既成事実化していきます。戦後、民主的国家として再出発したといわれ、しかも、それから半世紀近く経つにも拘らず、こうした特徴は微塵も変化していないばかりか、益々強くなっていっているように思われます。この事は、日本が再度ファシズムの中に取り込まれる危険を持っていることを示唆しているが故に、将来の日本を背って立つ君達若い友人達に、よくよくこの点を考えて頂きたいと思います。

昔流行った、「誰か故郷を想わざる」という唄（西条八十作詞・霧島昇唄）があります。私は、この唄の歌詞が大好きです。

花摘む野辺に日は落ちて 皆で肩を組みながら 唄を歌った帰り道

幼なじみのあの友この友 あゝ誰か故郷を想わざる

一人の姉が嫁ぐ日に 小川の岸で寂しさに 泣いた涙の懐かしさ

幼なじみのあの山この川 あゝ誰か故郷を想わざる

誰しも幼い頃を過ごした土地・風俗・人情に懐かしさと同時に、それを何時までも他の人々と共有したいという気持ちを持っています。当時10才になったばかりの私の子供が、片手を胸に、もう一方の手を高く挙げ、髪の毛の色・目の色・皮膚の色の異なった友達達と一緒に、真剣にアメリカ国歌を歌っていた姿、その純真で汚れのない姿を、私が育ち、私の幼い頃の郷愁を残しているこの日本の国の中で見たいと思います。